

# 令和7年度普及指導活動成果事例

令和8年4月

青森県農林水産政策課

	ページ
<b>東青（管轄市町村：青森市、平内町、外ヶ浜町、今別町、蓬田村）</b>	
1 「青天の霹靂」・「はれわたり」の高品質安定生産	1
2 トマト指定産地の生産力向上	2
<b>中南（管轄市町村：弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、大鰐町、西目屋村、田舎館村）</b>	
1 水田への高収益作物（にんにく）の作付推進	3
2 中南型りんご高密度植わい化栽培の導入推進	4
3 黒石市における有機農業の推進	5
4 水田農業の活性化に向けた経営拡大の仕組みづくり	6
<b>三八（管轄市町村：八戸市、三戸町、五戸町、田子町、南部町、階上町、新郷村）</b>	
1 ながいも産地の維持に向けた若手生産者の技術力向上	7
2 高品質りんごの安定生産に向けた交信かく乱剤の普及拡大	8
3 三八型農業経営改善モデルの創出	9
4 次世代につながる産直組織の運営体制強化	10
5 産地の刷新に向けた「たっこにんにく」の振興	11
<b>西北（管轄市町村：五所川原市、つがる市、鱒ヶ沢町、深浦町、板柳町、鶴田町、中泊町）</b>	
1 良食味米として消費者に評価される 「はれわたり」及び「青天の霹靂」の高品質・安定生産	12
2 稼げる「西北型水田農業」の定着に向けたスマート農業の活用推進	13
3 交信攪乱剤「コンフューザーR」を活用した適正防除の普及による 高品質りんごの輸出基盤強化	14
4 持続可能で活力のある農山漁村づくりを目指した 「あおもり型農村RMO」の育成	15
5 中小規模稲作経営体への高収益野菜導入による複合経営の普及拡大	16
<b>上北（管轄市町村：十和田市、三沢市、野辺地町、七戸町、六戸町、横浜町、東北町、六ヶ所村、おいらせ町）</b>	
1 担い手育成と種苗増殖法の転換によるながいも産地力の強化	17
2 新規就農者の定着と経営管理能力の強化	18
3 技術改善と基本技術の徹底による大豆の生産力強化	19
4 水稻生育障害発生水田における主食用米安定生産	20
<b>下北（管轄市町村：むつ市、大間町、東通村、風間浦村、佐井村）</b>	
1 新規就農者の総合的なスキルアップとサポート体制強化	21

# 1 「青天の霹靂」・「はれわたり」の高品質安定生産

## 【概要】

- 東青地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導プロジェクトチームを核として生産者や関係機関と情報共有し、講習会や個別指導等を通して、生産者の生産意欲向上と安定生産を目指した。

## 【背景・課題】

- 「青天の霹靂」は、これまでの出荷データの分析により、生産目標を下回る生産者が固定化する傾向がみられることから、ブランド維持のためには生産者個々の作付ほ場の条件や栽培方法を確認し、改善点を指導する必要がある。
- 令和5年から本格的に作付けが始まった「はれわたり」の高品質安定生産のためには、関係機関等との密な連携により、適時適正な指導を展開する必要がある。

## 【普及指導活動の内容】

- 東青地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導プロジェクトチーム連絡会議を開催し、関係機関と活動内容等について意識統一した。
- プロジェクトチーム現地検討会を開催し、今年の管内の水稻生育状況や病虫害の発生状況、追肥指導等について情報共有した。
- 育苗期、追肥時期、刈取時期に講習会を開催し、高温で経過していることから、飽水管理等により地温を下げる水管理や適期刈取指導を徹底した。
- 「青天の霹靂」作付者全員に栽培ポイントを示した「生産者カルテ」を配布するとともに、出荷基準を下回った生産者に対して個別指導を実施した。

## 【成果】

- 「青天の霹靂」の1等米比率は89%で、前年並みを確保した。また、昨年出荷基準を下回って個別指導を行った生産者3名は全員出荷基準を達成した。
- 「はれわたり」の1等米比率は93%で、目標の90%を上回った。

## 【対象名】

青森農協「青天の霹靂」生産者部会（32名）、青森県米穀集荷協同組合「青天の霹靂」作付生産者部会（2名）、(株)KAWACHORICE（7名）  
管内「はれわたり」作付者



東青地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導プロジェクトチーム現地検討会



適期刈取講習会



東青地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導プロジェクトチーム連絡会議

## 2 トマト指定産地の生産力向上

### 【概要】

- 省力化に有効な自動灌水施肥システムの導入を推進した。品種特性や天候に応じた肥培管理について指導を徹底するとともに、高温対策の必要性について啓発し、遮光技術の導入を促した。また、新規作付者等を中心とした個別巡回指導を行い、栽培技術の向上を図った。

### 【背景・課題】

- 管内のトマトは、高齢化や労働力不足等により栽培面積の減少が続いている。一方、ミニトマトは一戸当たりの栽培面積が増加傾向にあり、両品目とも省力化が課題となっている。
- 夏場の高温から裂果や軟果等の障害果が発生しており、障害回避のための技術対策や品種の切替等が必要となっている。
- ミニトマトは新規作付者が増加していることから、技術レベルの早期向上による経営安定化が急務となっている。

### 【普及指導活動の内容】

- AIによる自動灌水施肥システム「ゼロアグリ」を活用した実証ほを設置し、関係機関による情報共有と管内での実用性について検討するための現地検討会を開催した。また、次年度行う2年目の実証に向けて、他県のシステム既存ユーザーとの意見交換会を行った。
- 高温に強い品種を選定するため、「りんか409」や「れおん」の品種比較ほを設置し、講習会で生育状況について情報提供したほか、高温対策として、遮光技術の導入を促した。また、「りんか409生産情報」を4回発行し、品種特性に応じた肥培管理について周知した。
- ミニトマトの新規作付者等に対して個別巡回を行い、生育状況に応じた肥培管理や誘引方法、仕立て方法等について指導した。講習会で自動かん水施肥システムの導入により、かん水や追肥に要する作業時間が大幅に削減されること等について周知した。

### 【成果】

- 自動灌水施肥システム導入者は1名増の17名となった。
- 高温対策として、遮光資材を活用した対策が有効であることが認識され、遮光対策実施者は1名増の32名となった。
- ミニトマトの単収5 t/10 a以上の生産者は1名増加し10名となった。

### 【対象名】

- 青森農協トマト部会(67名)
- 青森農協ミニトマト部会(30名)



AI自動灌水施肥システム「ゼロアグリ」



「ゼロアグリ」現地検討会



品種比較ほ

# 1 水田への高収益作物（にんにく）の作付推進

～ほ場整備地区へのにんにく導入とにんにく産地の維持・拡大を目指して～

## 【概要】

- 管内のほ場整備地区では、生産者の所得確保に向けた高収益作物の導入が必要であることから、ほ場整備地区におけるにんにくの作付面積拡大を図るため、指導を行った。
- 管内全体のにんにく産地の維持・拡大を図るため、会議の開催による情報共有、現地講習会の開催による指導等を行った。

## 【背景・課題】

- 管内のほ場整備地区において、当地域で産地化されており高収益が見込まれる「にんにく」を導入し、所得向上を図る必要がある。
- 高齢化や労働力不足等により、管内全体でにんにくの作付面積が減少傾向にあることから、現状や課題の把握に努め、にんにく産地の維持・拡大を図る必要がある。

## 【普及指導活動の内容】

- ほ場整備地区の弘前市三省地区では、生育調査の結果を活用して、個別指導を行った。また、藤崎町福島地区の生産者に対して、講習会を通じて栽培指導を行った。
- 中南地域にんにく優良種苗生産指導プロジェクトチーム会議を開催し、関係機関と情報共有を図った。
- 藤崎町に生育観測ほを3か所設置し、そのデータを活用して、追肥、収穫、植付けの講習会を農協と連携して行った。
- 新品種「青森福雪」の実証ほを2か所設置し、生育、収量調査を行った。

## 【成果】

- P T会議で、本年産のにんにくの生産状況や生産者のにんにく作付の意向や課題、新品種に係る情報の共有が図られた。
- にんにく部会員に対して講習会で指導を行ったことで、適期作業が行われ、良品生産に繋がるとともに、優良種苗生産に対する理解が深まった。
- ほ場整備地区の藤崎町福島地区でにんにくの作付面積が増加したことから、2ほ場整備地区におけるにんにくの作付面積は6.3haと目標の5haを上回った。

## 【対象名】

- J A津軽みらいときわにんにく部会(89人)
- つがる弘前農協にんにく部会(57人)
- ほ場整備地区担い手農業者(弘前市三省地区：8人・法人、藤崎町福島地区：29人・法人)



中南にんにくP T会議(12/4)



収穫期講習会(6/20)



新品種「青森福雪」の収穫期の様子

## 2 中南型りんご高密度植わい化栽培の導入推進

～1年生ノンフェザー苗木を利用した高密度植わい化栽培の導入推進支援～

### 【概要】

- ・本県のりんご高密度植わい化栽培技術確立に向け、現地モデル園を設置し栽培管理等調査を行った。
- ・栽培技術の早期普及に向け、関係機関・団体と連携し研究会を開催して、情報共有を図った。
- ・実証成果と現地知見を体系的にまとめた「中南型高密度植栽培ガイドブック」を作成し、中南地域における新たな標準技術の普及を図った。

### 【背景・課題】

- ・高密度植わい化栽培の円滑な導入を支援するため、高品質安定生産技術の確立と早期普及を図る必要がある。
- ・苗木不足の解消に向けた1年生ノンフェザー苗木での高密度植わい化栽培技術を実証する必要がある。

### 【普及指導活動の内容】

- ・りんご研究所及び現地モデル園を設置し、栽培管理等の調査を行った。
- ・関係機関を構成員とする「中南地域高密度植わい化栽培推進研究会」を開催し、高密度植わい化栽培導入者への支援体制の強化と栽培管理等の情報共有を図った。
- ・高密度植わい化栽培の先進地である長野県に視察を行い、最新情報を収集した。
- ・3年間の実証成果と現地知見を体系的にまとめ、活動の集大成として「中南型高密度植栽培ガイドブック」を作成した。

### 【成果】

- ・「中南地域高密度植わい化栽培推進研究会」を3回開催し、現地モデル園の調査結果等の報告や次年度計画について検討した。
- ・中南型の夏季と冬季の栽培管理について、平川市密植栽培研究会会員を講師に2回研修を行った。
- ・視察で得た知見は、本県に適した栽培手法への改善や、「中南型高密度植栽培ガイドブック」の作成にあたっての重要な指針となった。
- ・本冊子では、特に整枝技術を詳細に整理し、栽培導入のポイントを明確化した。関係者間での綿密な打ち合わせを経て令和8年3月に発行された本ガイドブックは、今後のさらなる普及を支える技術的基盤となった。

### 【対象名】

- ・平川市密植栽培研究会（44名）
- ・中南管内のりんご高密度植わい化栽培生産者（62名・法人）
- ・高密度植わい化栽培導入予定生産者



先進地視察研修（長野県）



中南地域高密度植わい化栽培推進研究会



冬期栽培管理研修会

### 3 黒石市における有機農業の推進

～有機農業の取組拡大と生産物の安定供給を目指して～

#### 【概要】

- 黒石市は、令和3年度に「くろいし有機農業推進協議会（事務局：黒石市農林部農林課）」を設立し、令和4年度には「オーガニックビレッジ宣言」をして、有機農業を推進している。
- 有機農業者や取組志向の農家を対象に、有機農業技術実証ほの設置や現地検討会の実施、個別巡回調査に基づく栽培管理指導により、有機農業の取組拡大や生産物の安定供給を支援した。

#### 【背景・課題】

- 有機栽培は慣行栽培と比べ、栽培上のリスクが高く安定生産が難しいため、黒石市の有機農産物は水稻と大豆が大部分を占めているが、ミニトマト、アスパラガスで有機JASを取得し、令和6年産からミニトマトは学校給食へ提供されるなど、新たな取組も見られている。
- 有機米や有機野菜の安定供給に向けて、栽培支援を行う必要がある。

#### 【普及指導活動の内容】

- くろいし有機農業推進協議会の令和6年度総会において、「有機栽培面積の拡大」、「有機農業者の増加」などの組織目標を確認し、その達成に向けて各会員が取り組むことに合意した。
- 有機JAS認証を取得している取組者のほ場にプレミアム米栽培技術実証ほを設置し、生育調査等を行った。
- 環境にやさしい栽培技術実証ほ（にんじん）を設置し、太陽熱養生処理に係る現地検討会を開催した。
- 「ムツニシキ」栽培者を対象に、現地巡回・調査を行い、連絡会議において生産上の課題や対応策を助言した。

#### 【成果】

- 「ムツニシキ」生産者からは、連絡会議において来年度も栽培を継続し、すし組合と良好な関係を築いていくことが確認できた。
- にんじんの実証ほにおいて、太陽熱養生処理による抑草効果は高かったことが確認できた。

#### 【対象名】

- 有機農業取組者（18名）
- 取組志向農家（3名）



水稻の有機栽培実例（紙マルチ田植）



水稻の有機栽培実例（紙マルチ田植）



現地検討会（にんじん実証ほ）

## 4 水田農業の活性化に向けた経営拡大の仕組みづくり

～地域農業の未来を支える担い手が経営拡大できる仕組みを共に考える～

### 【概要】

- 平川市尾上地区の現状を関係機関が共有し、強い要望があったほ場整備に関連する勉強会を複数回開催した。
- 省力効果が期待される技術研修会の開催、実証ほの設置、経営改善研修会を開催した。

### 【背景・課題】

- 平川市は、2020年農林業センサスにおいて、後継者を確保している農業経営体数が全体の21.6%、その経営耕地面積は30.2%に留まり、地域農業の衰退が懸念されている。
- 尾上地区は小区画圃場や土側溝が多く、経営規模拡大の障壁となっている。

### 【普及指導活動の内容】

- 農業者、平川市、農業委員会、JA津軽みらい、浅瀬石川土地改良区、あおもり農業支援センター、県による連絡会議を計5回開催した。
- スマート農業機械の導入効果について理解を深めるための研修会や、所得向上に向けた経営改善のための研修会を開催した。
- 経営拡大に向けて省力効果が高いとされる農業用ドローン活用による水稻乾田直播栽培の播種作業体系の実証ほを設置した。

### 【成果】

- 連絡会議を通じて、尾上地区の現状を共有するとともに、地元の要望としてほ場整備の推進が強く求められていることを確認。要望を受けて、ほ場整備事業関連制度の紹介や事業実施地区の現地視察、農地集約化に向けた先進事例等を紹介し、ソフト・ハード両面の取組方向について理解が深まり、平川市はほ場整備事業に着手する方針を決定した。
- 研修会を通じて、大豆栽培での自動直進機能を利用した高精度な播種作業により除草作業の省力効果が高まることや、スマート農機と連携して活用する栽培管理支援システムについて理解が深まった。また、所得向上に結び付く青色申告書を活用した経営分析方法について理解が深まった。
- 農業用ドローンを活用した播種作業体系の実証ほでは、省力の程度、収量及び品質への影響を評価し、経営規模拡大に寄与できる可能性が明らかとなった。

### 【対象名】

- 平川市尾上地区  
土地利用型作物生産者  
(297経営体)



第4回連絡会議 (12/19)



大豆スマート農業研修会 (7/17)



農業用ドローンの実証ほ

# 1 ながいも産地の維持に向けた若手生産者の技術力向上 ～研修と生産技術チェックシートによる技術改善～

## 【概要】

- 若手生産者の技術力向上に向けて、ながいもの施肥体系が形状に及ぼす影響や排水対策等について学ぶことにより、技術改善に前向きな姿勢がみられた。また、「チェックシート」の活用により個別の生産技術の状況確認と改善を促した。

## 【背景・課題】

- ながいも産地を維持していくためには、担い手となる若手生産者の育成が重要である。
- 令和2年度に若手研究会会員を対象に行ったアンケート調査では、栽培面の課題として品質の向上、収量の安定化が挙げられており、基本技術の徹底と種苗更新の意識付け、個々の生産技術のレベルアップが不可欠である。

## 【普及指導活動の内容】

- 昨年度の担い手育成塾において、野菜研究所職員を講師にながいもの施肥体系が形状に及ぼす影響や追肥判断及び排水対策について座学研修したところ好評だったため、今年度はJA八戸及び野菜研究所と連携して、10月15日に野菜研究所においてJA八戸ながいも専門部全体を参集範囲とした現地研修会を開催した。
- 担い手育成塾研修会を2月20日に八戸市のユートリーにおいて開催した。令和7年産の振り返りと令和8年産の高品質多収に向けた座学研修を行うとともに、参加者がチェックシートにより自己評価を実施した。

## 【成果】

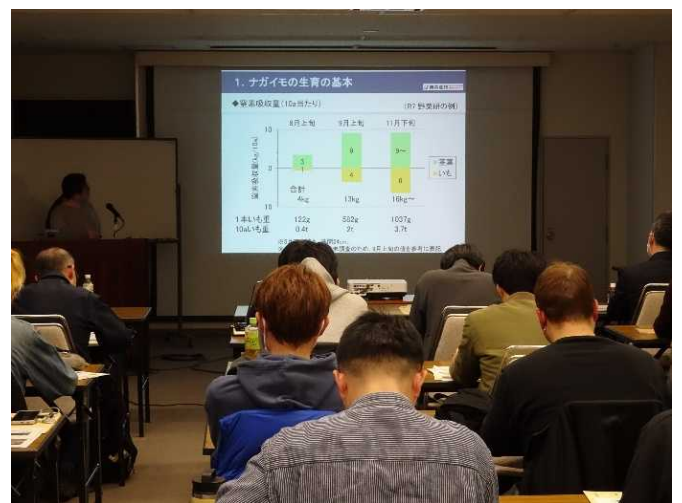
- ながいも専門部の現地研修会には29名が参加し、そのうち若手生産者は10名であった。参加者は、コブや溝などの障害いも対策や排水対策について質問し理解を深めていた。
- 担い手育成塾研修会は若手生産者16名が参加し、追肥に関する質問が出され、生育を見て追肥時期が遅れないようにすることや8月上旬の茎葉の繁茂状況を確認して肥料を切らさないことが重要であると理解された。
- 生産者14名が「チェックシート」により自己評価を行い、11名の技術の改善を確認した。主な改善内容は、病害虫防除5名、輪作4名、適期追肥3名、排水対策及び優良種苗の導入が各2名であった。

## 【対象名】

八戸農協野菜総合部会  
ながいも専門部  
ながいも若手研究会（49名）



JAながいも専門部の研修会（10/15）



担い手育成塾研修会（2/20）



積極的に質問する参加者（同上）

## 2 高品質りんごの安定生産に向けた交信かく乱剤の普及拡大

### 【概要】

- りんごの害虫対策が困難になることが想定されている中で、県では交信かく乱剤を令和6年病虫害防除暦に採用したが、現場での設置率が低いことから、JA八戸と協力して効果や設置方法等についての調査、周知を行った。

### 【背景・課題】

- 夏場の高温の影響や一部の殺虫剤で登録更新が行われないなど、今後、殺虫剤のみでの害虫防除が困難になることが予想される。
- 令和6年に交信かく乱剤を県の防除暦に採用したが、設置の必要性や、効果、正しい設置方法が周知されていない。

### 【普及指導活動の内容】

- 交信かく乱剤を普及するとともに必要性を周知するため、講習会を実施し、フェロモントラップを三戸町梅内及び五戸町倉石に設置して発生消長を調査した。
- 交信かく乱剤の使用方法を周知するため、両地区に交信かく乱剤展示ほを設置し、展示ほを活用して設置実演会を行った。
- 対象害虫の発生消長調査で高い交信かく乱効果が確認されたことから、結果を取りまとめ、講習会や防除暦検討会等で説明した。

### 【成果】

- 4～5月にかけて講習会を行い、病虫害の適正防除と交信かく乱剤の必要性について説明したところ、概ね理解され、前年よりも交信かく乱剤の設置面積が増加した。
- 交信かく乱剤設置展示ほにおいて、設置実演会を実施した。設置方法の説明の後、参加者が実際に交信かく乱剤を設置し、取り付けが意外と簡単だと話す生産者がいる一方で、効果が切れた剤の撤去が大変と感じている生産者もいた。
- 発生消長調査を農協と一緒にを行い、情報を共有し、調査結果を9月の講習会や防除暦検討会等で説明し、効果について周知を行った。また、各共防の防除暦作成会等でもトラップ調査の結果を示しながら、来年度の交信かく乱剤の導入を呼びかけたところ、防除暦へ新たに交信かく乱剤を採用する共防や継続設置する共防があるなど、交信かく乱剤の設置の必要性が理解された。

### 【対象名】

管内共防地区連（39組織）  
管内りんご生産者



設置実演会での説明（5/15）



栽培講習会での説明（9/9）



病虫害防除暦解説講習会（2/3）

### 3 三八型農業経営改善モデルの創出

#### 【概要】

- 農業経営力の向上に向けた改善活動を伴走支援し、管内の地域経営体等の所得向上を図るため、様々な経営改善を通じた経営力の強化により、課題解決につながるモデルを実証した。
- 都市部の大企業等で働く副業人材を活用した新商品の開発や大都市向け営業による売上増などに取り組む「副業人材活用モデル」を実証した。
- 首都圏在住者などの農作業を手伝う人材の受け入れによる労働力確保や地域交流に取り組む「都市農村交流推進モデル」を実証した。

#### 【背景・課題】

- 三八地域の経営体が今後所得の向上を図り、持続的に発展していくためには、規模拡大に必要な労働力の確保等による効率的な営農が重要となっている。
- 経営課題の解決に取り組む経営体を確保し、育成するほか、取組事例を普及させていく必要がある。

#### 【普及指導活動の内容】

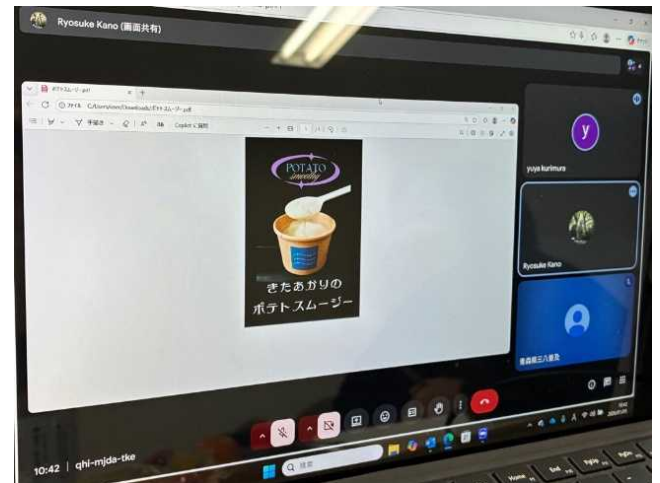
- 副業人材活用モデルについて、1経営体を対象に、経営課題を整理するとともに課題解決に向けた伴走支援を行った。
- 都市農村交流推進モデルについて、管内の3経営体を対象に、新たな労働力の受入に向けた伴走支援を行った。
- 2つのモデルの取組事例について、管内の農業経営士や青年農業士等に周知した。

#### 【成果】

- 1経営体が副業人材を1名雇用し、新商品の開発と販売に取り組んだ結果、1品が商品化に向けた最終調整段階となり、今後の販売戦略について多くの助言を得た。
- 3経営体が、「おてつたび」を活用し、延べ8名の旅行者を受け入れて、農繁期の労働力を確保することができた。
- 取組事例を管内のリーダー農家へ周知したことで、課題解決に向けた新たな手法をPRすることができた。

#### 【対象名】

地域経営体（129経営体）  
地域経営体候補



副業人材とのオンライン会議（1/5）



旅行者募集サイト作成（8/5）



旅行者のにんにく植付作業（10/3）

## 4 次世代につながる産直組織の運営体制強化

### 【概要】

- 五戸町にある産地直売所「ふれあい市ごのへ」は、町の支援を受けず自立した組織として活動していくため、専門家と連携した法人化検討会等を実施し、「株式会社ふれあい市ごのへ」の設立に至った。
- 新たな法人においては、新規事業としてPOSレジデータを活用した経営改善の実施、新規会員の獲得、地域貢献活動の開始などを行い、体制の強化につながっている。

### 【背景・課題】

- これまで、五戸町から指定管理を受け活動してきたが、町の支援を受けずに自立した組織として活動していくため、組織運営体制の強化に向け、法人化することとなった。
- 会員数は開設以来約60人を維持していたが、現在は52人にまで減少しており、次世代を担う人材の育成が急務である。

### 【普及指導活動の内容】

- 税理士や司法書士、社会保険労務士、中小企業診断士等の専門家と連携し、事業計画や定款の作成を支援した。
- POSレジデータを活用し、3回のトライアル期間を設け、販売目標設定、対策等を検討、実施、実施後の検討を支援した。
- 収支計画の作成を支援し、手数料収入の試算から新規会員獲得の必要性を明らかにした。
- 夏場の高温対策等の産直向け野菜の栽培講習会や、漬物加工講習会を開催した。
- 地域貢献活動として子ども食堂の代表者を紹介し、食材提供の話し合いを進めた。

### 【成果】

- 定款作成や事業計画作成など着実に準備を進め、法人化することができた。
- データに基づく販売計画作成、出荷依頼、販売の工夫、実施結果分析のサイクルが定着しつつある。
- 新規会員獲得の必要性を理解した役員等が中心になって声かけを行い、新たに10名が加入した。
- 役員が子ども食堂との話し合いを進め、9月から食材提供が開始された。

### 【対象名】

ふれあい市ごのへ会員（52人）



事業計画の検討（7/10）



全体会議で販売目標を共有（8/8）



建物の譲渡セレモニー（7/1）

## 5 産地の刷新に向けた「たっこにんにく」の振興

### 【概要】

- 田子町オリジナル品種「たっこ1号」の生産性向上のため、気候変動や病害虫対策に関する講習会を開催し、栽培管理技術の周知を図った。
- 先輩生産者の技術や経験を若手に継承するため、生産者同士が交流し、若手を育成する場の必要性を確認した。

### 【背景・課題】

- 「たっこにんにく」は、品質の良いにんにくの産地として県内外で評価されてきたが、生産者の高齢化が進み、担い手の確保と若手生産者の育成が課題である。
- 町オリジナル品種「たっこ1号」の高品質安定生産技術が確立されておらず、生産者数や出荷量が伸び悩んでいる。

### 【普及指導活動の内容】

- 良品生産のため、6月中旬にケーブルテレビで適期収穫の呼びかけを行った。
- イモグサレセンチュウ（以下、線虫）対策技術講習会（8月）、気候変動や虫害対策技術に関する講習会（2月）を開催し、管理技術のポイントを指導した。
- 「たっこ1号」の高品質安定生産に向けた現地試験の実施を支援した。
- 若手生産者の意見を聞き（11月）、先輩生産者に対し、生産技術の指導を希望する内容をつないだ（12月）。

### 【成果】

- 適期収穫を呼びかけたことで、約8割のほ場で6月中に収穫を終え、品質確保が図られた。
- 線虫対策技術のチェックリストを作成・配付し、生産者自身が被害低減技術の実施状況を確認できるようにした。引き続き、次年度の収穫前に、生産者にチェックリストを配付し、実施について確認する。
- 「たっこ1号」現地試験では、慣行の緑マルチに対して黒マルチの使用による収量・品質（割れ）に明確な差は認められなかった。おんぶ症については、施肥量が多いほ場で発生率が高まる傾向であることを生産者に情報提供した。
- 先輩生産者の間で、若手と世代間交流して技術や経験を継承することの必要性が共有された。

### 【対象名】

美六姫生産者の会（43名）



夏期講習会（8/29）



若手生産者の意見を聞く会（11/20）



冬期講習会（2/17）

# 1 良食味米として消費者に評価される「はれわたり」及び「青天の霹靂」の高品質の高品質・安定生産 ～消費者から信頼される米づくりの支援～

## 【概要】

- 西北地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導プロジェクトチームを核に、「はれわたり」の良食味・安定生産及び「青天の霹靂」のブランド維持のため、生産指導に取り組んだ。

## 【背景・課題】

- 「はれわたり」は、栽培のポイントが浸透しつつあるが、良食味・高品質米安定生産のために、関係機関と連携して栽培マニュアルに沿った栽培管理を広く指導する必要がある。
- 県産ブランド米「青天の霹靂」は、ブランド維持のために新規作付者や前年出荷基準未達者に対して、関係機関と連携しながら継続して重点的に指導を行う必要がある。

## 【普及指導活動の内容】

- 西北地域「青天の霹靂」・「はれわたり」生産指導プロジェクトチーム（PT）において、指導拠点ほの設置、夏季現地巡回の開催により「衛星ナビ」の活用等について関係機関と意識統一を図った。
- 「はれわたり」生産者に対して、高温時の水管理について重点的に指導したほか、「はれナビ」の周知と適期収穫の徹底を呼びかけた。
- 「青天の霹靂」新規作付者及び前年産の出荷基準未達成者等に対し、集荷団体の指導員と連携しながら個別指導を行った。

## 【成果】

- 「はれわたり」の管内JA一等米比率は98%以上で目標を達成した。
- 「青天の霹靂」新規作付者及び前年基準未達者の出荷基準達成者の合格者は13人であった。

## 【対象者】

- 「はれわたり」作付者(620名)、管内「青天の霹靂」作付者(304名うち、新規作付者(2名)及び前年産出荷基準未達者(14名))



育苗講習会(4/25)



PT夏季現地巡回(8/27)



適期刈取講習会(8/29)

## 2 稼げる「西北型水田農業」の定着に向けたスマート農業の活用推進 ～スマート農業の有効活用に向けた人財の育成～

### 【概要】

- 収量・品質の向上や生産効率を追求するスマート農業技術の普及を図るため、実証活動や情報提供をするとともに、技術を使いこなす多様な人財の育成に取り組んだ。

### 【背景・課題】

- 水田農業経営の大規模化が進行する中で、労働力不足等の課題に対応できるよう、令和元年からスマート農業技術の普及を推進してきた結果、スマート農機を導入する経営体が大幅に増加した。しかし、その機能を十分に活かし切れていないため、効果的な活用によるメリットの追求と活用できる人財の育成が求められている。

### 【普及指導活動の内容】

- データ駆動型農業技術を実証するため、「ザルビオフィールドマネジャー」の分析結果に基づき、可変追肥の実演会を開催した。
- 労働力不足に対応し、多様なオペレーターを養成するため、スマート農機の初心者等を対象に、自動操舵システムに関する基礎知識や基本操作に関する研修会を開催した。
- GNSSガイダンス自動操舵システムの導入メリットの紹介やシミュレーターによる本システムが体験できる研修会を開催した。

### 【成果】

- 「ザルビオフィールドマネジャー」を用いた可変追肥の実演会では、可変施肥マップのドローンへの取り込み、ドローンのセッティング等、詳細な操作方法について生産者の理解が深まった。また、生育マップを活用した可変追肥により、収量が向上し、ほ場内の収量のばらつきが小さくなった。
- 労働力不足に対応し、多様なオペレーターを養成するため、スマート農機の初心者、後継者、女性農業者、新規就農者など機械作業を普段していない人を対象にオペレーター養成研修を実施し、技術の習得を図った。
- GNSSガイダンス自動操舵システムの導入メリットである疲労軽減、作業効率や精度向上などによる生産性が向上することが理解された。

### 【対象名】

津軽米づくりネットワーク(49名)  
スマート農機導入経営体(368経営体)  
五所川原広域水田フル活用推進協議会(27名)



オペレーター養成研修会(6/28)



自動操舵システム研修会(1/13)



シミュレーター体験(1/13)

### 3 交信攪乱剤「コンフューザーR」を活用した適正防除の普及による高品質りんごの輸出基盤強化

#### 【概要】

- 管内のりんご生産者（りんご共同防除組織）を対象に、交信攪乱剤設置実演会、交信攪乱剤の特性や正しい設置方法を周知する講習会等を実施することで、設置面積の拡大及びモモシクイガ等の適正防除の普及拡大に取り組んだ。

#### 【背景・課題】

- 台湾に輸出されたりんご果実からモモシクイガが見つかった場合は、即、輸出停止となることから、完璧な防除が求められている。
- 近年は温暖化の影響により慣行防除を行っている園地でもモモシクイガ被害果の増加が確認されている。
- このような状況から、モモシクイガ等の主要害虫を適正に防除するため、病虫害防除暦の基準薬剤となった交信攪乱剤について効果や正しい設置方法等を周知し、普及拡大する必要がある。

#### 【普及指導活動の内容】

- 各共防連対象の病虫害防除講習会において、モモシクイガ等重要害虫の発生状況や交信攪乱剤設置を基準とした適正防除について周知した。
- 設置時期である5月に交信攪乱剤の設置実演会を開催し、交信攪乱剤の効果やその効果を最大限に発揮するための1樹当たりの設置本数、ディスペンサーの取り付け方法など正しい設置方法について周知した。
- 園地巡回や講習会等で、設置方法や設置時期などについて指導を行った。
- 設置方法の展示ほとして、正しく交信攪乱剤を設置した園地を管内5市町に1～2園地ずつ設置し設置方法の展示を行うとともに、交信攪乱剤効果及び被害発生状況を確認するための調査研究に取り組んだ。
- 調査研究課題として実証した交信攪乱剤の効果を取りまとめるとともに、交信攪乱剤設置の継続・拡大による次年産りんご適正防除のため、各共防連の防除暦説明会等で周知した。

#### 【成果】

コンフューザーRの設置による防除効果について周知され、令和7年産りんごの西北管内でのコンフューザーRの設置面積は1,269haから1,542haに増加した。

#### 【対象名】

管内のりんご共同防除組織及び管内りんご生産者



交信攪乱剤設置実演会 (5/13)



モモシクイガ等適正防除講習会 (5/15)



つがる市共防連  
りんご防除暦検討会議 (1/8)

## 4 持続可能で活力のある農山漁村づくりを目指した「あおり型農村RMO」の育成

### 【概要】

- 各市町の担い手育成総合支援協議会等と連携して「あおり型農村RMO」の育成に取り組むとともに、五所川原市三好地区の地域資源の発掘・活用、地域コミュニティの再生強化に向け「三好をあじあう会」の支援に取り組んだ。

### 【背景・課題】

- 農村地域は人口減少と高齢化が進行しており、コミュニティを維持するため、地域経営体や地域の住民が連携し、人口減少に伴う地域課題解決に向けて活動する地域運営組織等の育成が必要である。令和3年度から育成してきた地域運営組織「三好をあじあう会（五所川原市三好地区）」は、活動を主体的に進められるようになってきており、今後の活動の継続、発展に向けて支援を続け、さらに他地区への面的広がりを促す必要がある。

### 【普及指導活動の内容】

- 五所川原市及び板柳町の担い手育成総合支援協議会等と連携し、地域経営体の育成、共助・共存に向けた集落の意識醸成、地域資源の発掘・活用、担い手育成等に対する取組を支援。
- 地域運営組織「(一社)七和まちづくりネットワーク」が、「ジャズコンサートイベント（7/27）」、「収穫感謝祭（11/23）」を開催したほか、「鰐come祭り・秋（10/18～19）」に三好をあじあう会と共同で出店し、自然乾燥米のPR活動を行った。また、自然乾燥米の販売をブラッシュアップするため、検討委員会を2回（8/29・1/22）開催し、パッケージのブラッシュアップを行った。
- 地域運営組織「三好をあじあう会」が、「三好ザリガニ釣り大会（7/21・9/7、2回）」、「自然体験教室（8/23～24）」、「交流拠点整備講習会（12/13～14・20～21、2回）」、「民泊講習会（11/16・1/25、2回）」を開催し、イベントを通じてボランティア3名が活動に参加してくれるようになった。

### 【成果】

- 普及指導活動により、モデル集落の育成（三好をあじあう会）、地域資源活用（五所川原地域担い手協）、新規就農者の育成（板柳町担い手協）等が進んだ。（一社）七和まちづくりネットワークは自然乾燥米の販売におけるブラッシュアップを進め、三好をあじあう会は、イベントを通じた外部人材の交流を実現した。

### 【対象名】

あおり型農村RMO（Region Management Organization:地域運営組織）を目指す西北管内集落及び地域経営体



三好をあじあう会  
ザリガニ釣り大会(7/21)



三好をあじあう会  
自然体験教室(8/23～24)



七和まちづくりネットワーク「鰐come祭」出店(10/18～19)

## 5 中小規模稲作経営体への高収益野菜導入による複合経営の普及拡大

### 【概要】

- ・ 基盤整備事業では場整備が行われている中泊町の稲作経営の農業者を対象に、野菜栽培技術を実践しながら学ぶトレーニングファームを設置し、ここを拠点に現地情報交換会や省力化技術・鳥獣害対策の実演会を行い、複合経営の普及拡大に取り組んだ。

### 【背景・課題】

- ・ 中泊町では令和5年度から中山間地域の3地区で農地中間管理機構関連農地整備事業の工事が始まり、ほ場整備が部分的に完成した。
- ・ 工事をきっかけに野菜導入にチャレンジする動きがでてきたが、栽培への技術的な不安があることから、栽培技術を実践しながら学ぶ仕組みを整えるとともに、省力化や鳥獣害対策等を検討し、普及拡大を支援していく必要がある

### 【普及指導活動の内容】

- ・ 「トレーニングファーム」(中泊町今泉地区)を設置し、とうもろこしを栽培した。初めての野菜栽培であるため、現地講習会や個別指導により技術習得を図るとともに、良品多収のための土づくりや排水対策の重要性への理解を深めた。
- ・ 現地情報交換会(6/5、8/8、延べ75名)を開催し、生育状況や課題等を共有した。併せて、とうもろこしの播種作業の省力化に向け「目皿式播種機」による播種実演、鳥獣被害の現状や対策の解説、電気柵の設置実演を行った。
- ・ 情報交換会(12/18、23名)を開催し、薄市・今泉地区における野菜栽培の取組結果や課題、新品目の提案、野菜導入による収益力向上のためのロードマップや試算シートを関係者で共有し、今後の作付計画や目指す方向性を検討した。

### 【成果】

- ・ 中泊町の野菜導入経営体数が前年度の16戸から20戸に増加した。
- ・ 野菜栽培における技術の習得に加え、土づくりや排水対策の重要性が理解され、次年度に向けて、堆肥の施用やスタブルカルチを施工する等の動きがみられた。
- ・ 今泉地区では、とうもろこしに加え、ピーマンにもチャレンジする意向が示された。

### 【対象名】

- ・ 中泊町の中位小規模稲作経営体(101戸)
- ・ 新規就農者



目皿式播種機による  
とうもろこしの播種実演(6/5)



鳥獣害対策の説明(8/8)



情報交換会での意見交換(12/18)

# 1 担い手育成と種苗増殖法の転換によるながいも産地力の強化

## 【概要】

- J Aと連携した現地検討会等の実施により、ながいも栽培の基本技術の徹底を支援した。
- 担い手育成塾生を対象として、生産技術チェックシートを活用した個別指導や育成塾を開催し、栽培管理の改善を促した。
- 種苗供給体制の確立に向け、ウイルス検査や新品種実証ほ等を設置し切いも体系への転換を支援した。

## 【背景・課題】

- チェックシートを活用した聞き取り調査で、塾生ごとに異なる課題が挙げられたことから、それらに応じた個別の技術指導により栽培技術の向上を図る必要がある。
- 現状の「むかご」による種苗増殖方法では品種本来の特性を維持することが難しいことから、品種特性を維持できる「切いも」体系へ転換する必要がある。
- 生産性向上に向け、従来品種に比べ短くコンパクトな新品種の検討が必要となっている。

## 【普及指導活動の内容】

- 担い手育成塾生を対象に、「ながいも生産に関するチェックシート」を活用し、個別巡回指導を行った。また、育成塾やJ Aの講習会において、天候や生育状況に応じた追肥時期、追肥量の加減や、病虫害防除の指導を行った。
- 「切いも」体系による生産の実証ほや新品種「夢雪」の栽培実証ほを設置し、切いもの増殖方法や品種特性に合った栽培技術確立のため、関係者での検討会を開催し、特性や栽培方法について検討した。
- 種苗生産ほ場（種いも生産）においてウイルス罹病株の見分け方や抜取を指導し、ウイルス検査を行った。

## 【成果】

- チェックシートで確認した結果、個々の課題が指摘できたことで、塾生が課題を認識し改善意識の向上につながった。また、講習会等により、気候変動に応じた追肥判断や、病虫害多発時の農薬の選択方法等が理解された。
- 新品種「夢雪」の現地実証により、品種特性であるコンパクトな形質が確認されたほか、地域や土質による形状差があることも明らかとなった。
- 優良種苗生産では、ウイルス罹病株の見分け方や注意すべき防除対策が理解され、優良種苗の生産につながった。

## 【対象者】

- ① J Aゆうき青森ながいも担い手育成塾生（20人）
- ② J Aゆうき青森野菜振興会種子部会（10人）



担い手育成塾生個別指導（9/9）



ながいも新品種等成績検討会（12/17）



採種ほウイルス検査（9/5）

## 2 新規就農者の定着と経営管理能力の強化

### 【概要】

- 重点指導対象者を十数名選定し、個別課題の解決に向けて伴走支援を継続した。
- 「ヤングファーマーゼミナール」を開催し、先進地視察研修を行ったほか、基礎技術の習得及び経営管理能力の向上を支援した。

### 【背景・課題】

- 管内では、法人雇用就農を除く直近3か年の新規就農者数は減少傾向にあり、経営開始資金の活用者も限定的な状況である。
- これまで、重点指導対象者を選定し濃密な支援を行ってきたが、対象者からは継続的な支援や迅速な情報提供が求められている。
- 新規就農者等の早期育成と定着に向けて、基礎的な生産技術の習得と実践的な経営管理能力の向上を支援する取組みが求められている。また、農業士会と連携し、地域の生産体制に対応した栽培技術の習得や経営管理能力の向上、仲間作りを推進し、安定した自立経営が可能な農業者の育成を図る必要がある。

### 【普及指導活動の内容】

- 重点指導対象者に対し延べ90回以上の巡回・面談を実施し、技術及び経営両面からの伴走支援を行った。
- ヤングファーマーゼミナールを年間計画に基づいて実施した。土づくり、農薬の使い方、堆肥活用に係る営農基礎講座を計3回・延べ4日、農業士会と連携して、寅福プラント（むつ市）及びジョイントファーム（六戸町）への先進地視察研修を1回、農作業安全等研修を1回、農業経営研修を3回、延べ7日開催した。

### 【成果】

- 重点指導対象者に対する継続的な支援により、個々の技術課題の整理と改善意欲の向上が図られた。
- ヤングファーマーゼミナールは、重点指導対象者を中心とした参加誘導と、就農後間もない生産者の掘り起こしにより、参加者を確保した。また、農業経営アドバイザーによる農業経営研修では、経営分析シートに基づく振り返り実習やミニ相談会を通じて経営管理能力の向上を図ることができた。

### 【対象者】

就農5年以内の農業者、農業次世代人材投資資金等受給者（25人）、青年等就農資金借入者（35人）、法人雇用就農者、就農希望者、準備型研修受講者（1人）



市町村のサポート巡回と連携した、重点指導対象者に対する個別巡回活動（9/29、三沢市）



オランダ型ハウスのトマト植物工場を経営する寅福プラントを見学した先進地視察研修（9/5）



農業経営アドバイザーによる経営分析手法を取り入れた農業経営研修（3/25）

### 3 技術改善と基本技術の徹底による大豆の生産力強化

#### 【概要】

- 生産情報の提供、大豆生産者座談会・栽培講習会の開催及び実証ほの設置等により、適期作業と基本技術の徹底を支援したほか、大豆栽培技術改善策整理票の作成を通じて各経営体の課題を洗い出し、技術改善の取組を支援した。

#### 【背景・課題】

- 大豆の収量は年次変動が大きく安定した所得の確保が難しいことから、経営体に合わせた効果的な技術改善策の導入により、生産性の向上を図る必要がある。
- 上北管内では県の指導要領より栽植密度が疎植な経営体が多いことや作業時期の遅れによる雑草の多発等の課題があるため、基本技術の徹底が必要である。

#### 【普及指導活動の内容】

- 生産情報誌「だいでず通信」を発行し、生育調査結果に基づいた作業適期の情報を発信し、基本技術の徹底や適期作業の実施を支援した。
- 経営体ごとに大豆栽培技術改善策整理表を作成し、整理表に基づいた技術改善を提案するとともに、導入を支援した。
- 上北地域大豆生産者座談会を開催し、令和7年度の大豆の生育概要や新たな雑草管理技術による除草効果を検証する実証ほの成果、大豆栽培におけるスマート農業技術の活用方法等の情報提供並びに生産者間での意見交換等を行い、大豆生産者の技術力向上を図った。

#### 【成果】

- 生産情報誌「だいでず通信」は、経営体の作業計画に役立てられ、使用薬剤や作業時期の見直しにより、栽培管理の適正化が図られた。
- 10経営体において、栽植本数や除草体系の見直し等の技術改善に取り組んだ。対象12経営体の平均収量は178kg/10aと、基本技術の徹底と経営体に合わせた技術改善策の導入が効果的であることが確認された。

#### 【対象者】

- ①集落営農組織（3組織）
- ②大規模生産者（9戸）

計12経営体



茎葉処理除草剤の早期散布実証ほ



適期刈取指導(11/5)



大豆生産者座談会(2/27)

## 4 水稻生育障害発生水田における主食用米安定生産

### 【概要】

- 令和6年5月の田植え後に、海水の流入が原因と考えられる水稻の生育障害が発生したことから、水田土壌の塩類濃度を把握するとともに、関係機関と連携し、農業者の除塩作業の実施を支援した。

### 【背景・課題】

- 令和7年3月に全68ほ場の土壌ECを測定した結果、12ほ場が除塩が必要となる基準値0.5mS/cm以上であった。塩類濃度障害を回避するためには、石灰資材の散布による除塩作業の実施と、生育状況に応じたきめ細かな肥培管理を指導する必要がある。

### 【普及指導活動の内容】

- 水稻育苗講習会において、除塩作業の実施と丁寧な代かき、栽植株数の確保、雑草防除の徹底を指導した。
- 除塩作業実施後に土壌ECを測定し、全ほ場の塩類濃度が基準値以下に低下したことを確認し、結果を農業者に情報提供した。
- 町、JA、土地改良区、共済組合、県（農業普及振興室・農村計画課）、農林総合研究所で構成する「関係者連絡会議」を開催し、土壌分析結果や生育状況について情報共有するとともに、今後の対応を検討した。
- 令和6年度に被害が著しかったほ場2か所の生育調査を行い、生育状況と技術対策について土地改良区に情報提供するとともに、個別に現地指導を行った。

### 【成果】

- 町が独自に石灰資材の購入や燃料代への補助を行うなど、関係機関が一体となって除塩作業を指導した結果、除塩が必要な農業者6名全員が石灰質資材の散布による除塩作業を実施した。
- 除塩作業ときめ細かな肥培管理が行われたことにより、生育量が十分に確保され、生育観測ほ場の坪刈り収量は10a当たり13俵以上となった。また、1月に実施した聞取調査結果でも、地域の平均収量は10a当たり約10俵となった。
- 地域の作柄が回復したことから、関係機関連絡会議で検討した結果、来年度からは通常の栽培管理とすることで一致した。

### 【対象者】

おいらせ町日ヶ久保地区の稲作農家  
(16人)



水稻育苗講習会 (4/23)



水田土壌採取 (5/12)



豊かに実ったほ場 (9/12)

# 1 新規就農者の総合的なスキルアップとサポート体制強化

## 【概要】

- 新規就農者等の確保・育成を図るため、下北地域新規就農支援協議会を設置し、支援している。
- 主力作物である夏秋いちご生産者の栽培技術の向上を図った。
- 冬場の所得向上に向けてたらのめの栽培技術の向上を図った。

## 【背景・課題】

- 非農家出身の新規就農者が多く、栽培技術、経営管理能力の習得が不十分なため、所得目標を達成できない人が多い。
- 夏秋いちごは夏期の高温や土壌病害の発生等により収量が低下している。
- 冬場の収入源としてたらのめ栽培に関心を示す新規就農者が増えており、技術習得に向けた指導が必要となっている。

## 【普及指導活動の内容】

- 下北地域新規就農支援協議会を開催し、情報の共有方法や経営管理能力向上研修会の内容、支援のあり方について意見交換した。
- 経営開始5年未満の農家をリストアップし、個別巡回指導したほか、個別指導記録簿をJAに情報提供した。
- 複式簿記の基礎及び青色申告、パソコンを活用した簿記記帳、スマホアプリを活用した労務管理について研修会を開催した。
- 夏秋いちご栽培情報紙を発行し、病虫害防除や暑熱対策の指導に活用したほか、1作ごとの土壌消毒を指導した。また、栽培管理や鳥獣被害防止に係るセミナーを開催した。
- たらのめ生産者を個別巡回指導したほか、要所の作業については現地研修会を開催して作業の理解を深めた。

## 【成果】

- 協議会において関係機関、団体との情報共有が図られ、連携が強化された。
- 個別巡回指導や研修会を通して技術習得や経営管理能力が向上した。
- いちご生産において遮光資材による高温対策が実施されたほか、7戸で適切な土壌消毒が実施された。
- 新規就農者2名のたらのめの収穫が始まり、令和7年度出荷数量は目標の1.3倍となった。

## 【対象名】

新規就農者、就農希望者等（計19名）、川内町山菜生産組合（6名）



第3回経営管理能力研修会（1/15）



しもきた夏秋いちごセミナー（7/2）



たらのめ現地研修会（5/21）